私の工夫

書く力を育てるために

県立岡山聾学校　小学部
教諭　西崎　祐子

1　はじめに

本校は聴覚障害のある幼児児童生徒が在籍する県内唯一の聾学校である。そのうち小学部では児童が補聴器や人工内耳を装用し、それぞれ聴覚を活用しながら、個に応じて手話や読話を用いてコミュニケーションをとっている。皆、自分の思いを教師や友達に伝えたいという意欲が旺盛で、自分なりのコミュニケーション手段で積極的に伝えようとする。しかし、聴覚から入る情報が限られているため、日本語としての言葉を十分に獲得できていない児童が多い。語彙検査の結果からも、日本語を理解したり表出したりする力に弱さがあることが分かった。また、日々の作文指導から、言葉を知らなかったりまちがった表記をしたりと、書くことにおいては、どの児童も課題を持っていることも明らかとなった。文字や文章で正しく伝える力をつけておくことは、将来、社会に参加する上でとても大切なことであると考え、小学部では平成27年度からの2年間、「書く力を育てるために」というテーマを設定し、実践研究に取り組んだ。

2　実践の内容

本研究では、日本語獲得の視点から実態の似た児童で小集団（7グループ）を作り、それぞれ書記日本語の力の向上を目指し実践した。その中から、動詞の活用等に課題があるAグループの自立活動の取組について紹介する。

授業風景

①児童の実態

年度始めのPVT-R絵画語い発達検査とJ.coss日本語理解力検査の結果は、語彙や文法の理解に課題がある児童もいるという状況だった。物の名称については、「手話では分かる」あるいは「見たことはあるが、日本語として知らない」語彙が共通して多いことが明らかとなった。動詞については場面が変わると語尾が変化するということに気付いてはいるが、「のむ」の否定形を問うと「のまらない」と答えるように、正しく活用させることに課題があった。

②目標

○正しく表記できる語彙（名詞と動詞）を増やす。
○動詞の活用シートを用いて動詞の語尾を正しく変化させ、その言葉を用いて短文を作る。

③取組

○カテゴリーでまとめる

聴覚に障害のある子どもは、「パン」「ラーメン」など具体物の名前を覚えても、それを上位概念である「食べ物」というカテゴリーに分類し覚えていくことを苦手とすることが多い。そこで、「○○〈例ショッピングモール〉に行く」という設定で、カテゴリーごとにイラストを集め、それぞれに名前を書き、上位概念としての名称も

書いて覚える活動をした。

○反対言葉をセットで覚える

「おす」「ひく」のように動詞の反対言葉をセットで学習した。一つの動詞について身振り、指文字、文字で確認することを約束とした。学習した語彙はイラストとあわせ、常に目に触れることができるように教室に掲示した。

○言葉のビンゴ

絵カードを用い、動詞のビンゴゲームをした。絵カードが示す言葉を指文字で友達に伝える場面を設定したことで、楽しく正しい日本語を学ぶことができた。

○動詞の活用

木島照夫先生（大塚ろう学校・東京学芸大学講師）の著書である「きこえない子のための日本語チャレンジ！」から動詞の活用シート（**図1**）を用いて指導した。本稿は白黒のため分かりにくいが、このシートは六色に色分けされており、可視化されているという点で耳から言葉が入りにくい児童にとって動詞を正しく活用させるのに大変役立った。

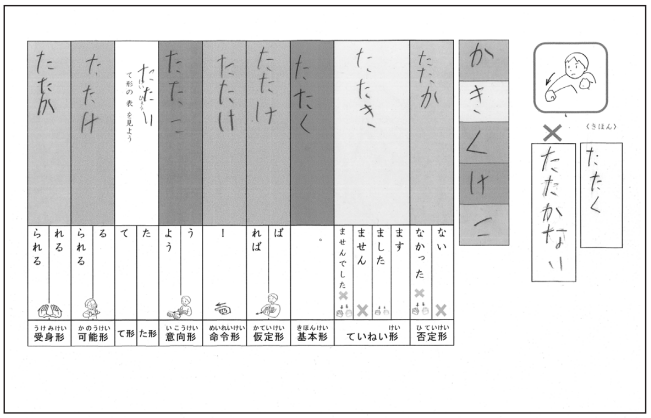

図１　動詞の活用シート

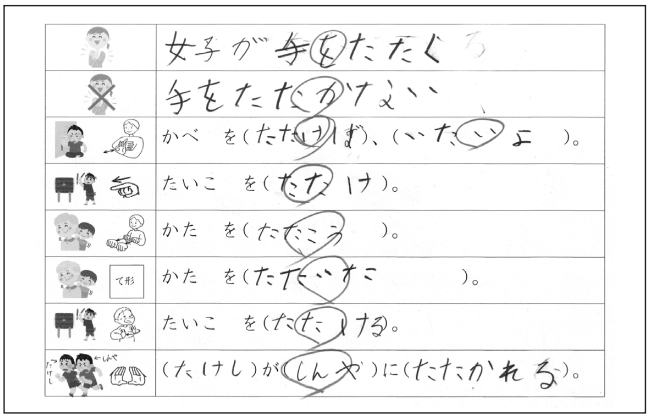

図２　短文作りプリント

活用シート記入後、**図2**のような短文作りプリントに取り組んだ。状況に応じた日本語を正しく書こうとする意識付けができた。また、それぞれの文を声に出して読むことで、日本語の調子を唇にのせて確認することもできた。

3　成果と課題

今回はAグループの実践例を紹介したが、他の6グループもそれぞれ児童の実態に即した指導を行い、小学部全体のJ.coss日本語理解力検査の結果は**図3**のように向上した（横軸は検査項目。縦軸は児童の何％が通過したか）。実態の似た集団で学習したことで、教師がねらいや学習内容を設定しやすく、児童も切磋琢磨しながら学習できた結果だと思う。また、木島先生作成のツールを参考に段階を追って実践できたことは書記日本語の力を向上させることへとつながった。

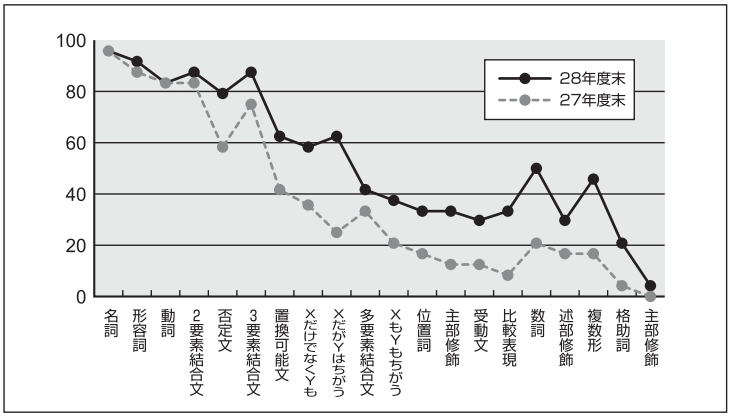

図３　J.coss日本語理解力検査の結果

一方で日本語語彙（単語）習得を課題とする児童の中には伸びが見られない者も数名いた。児童の発達の様子を丁寧に見て、生活経験を広げる支援をするとともに、意図的に日本語に触れる機会をよりいっそう設ける必要があると感じている。